

くらし

かな
思いは届き、夢は叶うものなのです(映画「白い船」より)

「サッカーの神様」の存在を口にしていた選手がいたが、昨年、稲佐の涙で話し合われたのだろう、なでしこジャパンが世界一の栄誉に輝いた。

ひたむきに走り、ボールを追いかける選手たちの姿に激しく心が動き、震えた。優勝の瞬間、テレビの前で、まるで映画のセリフのように「おめでとう、良かったね」と思わずつぶやいてしまった。ワールドカップを高々と持ち上げて歓喜するまでここに涙はない。女子がサッカーなんて…と言われていた時代から誰に言われたわけではない、「サッカーが好き」「サッカーをやれているだけで幸せ」という思いでボールを追いかけてきた彼女たちだからこそ笑顔なんだと思った。

誰も注目していない頃から黙々とやってきた彼女たちに悲壮感はない。夢を持つことのすごさを目の当たりにした。今まで光が当たっていなかったと

錦織監督

映画の現場から



●〇●8

"なでしこ"の快挙に感動

ここに光が当たった瞬間だ。ドイツからの帰国もエコノミー席。らしい凱旋(がいせん)だ。無名時代から支えてきたスタッフやスポンサー、サポーターに敬意を表したい。

女子サッカーに限らず、無名でも素晴らしいスポーツはたくさんあると思うが、不況が続く多くの実業団が廃部になっている中、女子サッカーを信じ、支え続けた人たちがいる。

私事だがふと、映画「白い船」以来、島根での映画作りを支えてくれている多くの人たちのことを思い出した。そして映画「ミラクルバナナ」でハイチの国の子供たちを支えている人たちのことや、一畑電車を支えてきた人たちのことも考えた。どんなことでも注目されない時から支えている人たちが必ずいるということをあらためて強調しておきたい。

スポーツや文化活動などは、とかく人々の生活や経済活動に直接関係ないと思われがちで、最初に予算カットされたり、すぐに成果や結果が出ないの合理的でないもの、として見られがちだ。しかし人間はそんなに合理的ではない。本当の感動は言葉にできないし、理屈はない。世の中にお金で買えないものがあることを、なでしこたちが教えてくれている。「フジヤマのトビウオ」と言われた水泳の古橋広之進選手の活躍が戦後の日本人の自信を取り戻したという話は有名だが、閉塞(へいそく)感がある今の日本にとって、それ以来の快挙だと思う。

私も負けてはいられない。今まで以上に心を込めて人々の心に効く映画を作っていきたい。

(錦織良成・映画監督)

— 第2、4金曜掲載 —

「RAILWAYSの映画化の企画は10年前のことだった…」

